

---

# 羽根のない妖精

イラル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

羽根のない妖精

### 【Nコード】

N5639J

### 【作者名】

イラル

### 【あらすじ】

羽根のない妖精がいた。

彼女には羽根を持つ妖精の恋人がいたが、羽根のない妖精は羽根を持つ妖精に触れることはできない。

そこへやってきたのは一人の人間。

妖精達は言い伝えを思い出す。

『人間と愛を誓えば、妖精は人間になれる。』

## 羽根のない妖精（1）

木々が生い茂る森の中。葉を押し退けて進むと、着くことができる場所がある。

それは、妖精の町。

彼等もまた、人と同じように日々を営んでいる。

妖精は、人と姿形が似ている。しかし、全体が掌ぐらいの大きさで、背中には透明の羽根が生えていた。

彼等は花の蜜を食料とし、蜂や蝶と友達だった。

町から少し離れた場所。綺麗な桃色の花びらの上で、小さな妖精と同じくらいの少女がいた。

いや、彼女も妖精なのである。羽根がない妖精なのだ。

一年前、彼女は羽根を失った。とある出来事によって。

彼女の名はノアーシャ。通称ノアと呼ばれている。

しかし、彼女は羽根を失ったことで、仲間と一緒に暮らすことはできなくなった。

彼女の唯一の味方は、彼女の恋人カルーシャ。通称カル。

しかし、羽根をなくした妖精は、羽根のある妖精に触れることはできない。

二度と触れることができない二人。

そして、ノアとカルは一つの言い伝えを聞く。

『人間と愛を誓えば、妖精は人間になれる。』

その後、妖精の町にやって来たのは一人の人間。

ノアとカルはどうするのか？

それはこれからのお話。

桃色の花びらの上で、今日もノアは空を見上げていた。空は木々の間から光となって顔を覗かせる。

「ノア！」

薄い水色の髪に藍色の瞳を発見して、カルは彼女の名を呼んだ。彼女も紫色の髪と瞳に笑顔を向ける。しかし、すぐにその笑顔は曇った。

「カル。今日も重そうね。」

ノアはカルの手元に視線を落とし、申し訳なさそうに言う。カルの手元には、大きな壺にたっぷり入った蜜が光輝いていた。カルは毎日ノアの食事を運んで来ているのだ。ただ、一日一食、自分と同じくらいの量を摂取しなければいけない妖精にとって、その量はかなり重い。

カルが羽根を休め花びらに着地する。そして、ノアの目の前にしゃがむと彼女に言った。

「どうってことないよ。ノアが死ぬことに比べたらね。」

妖精は蜜を摂取できなくなると、二日ともたずに死んでしまう。羽根を無くしたノアは、自分で蜜を集めることはできない。と、すれば。ノアは放っておくと死んでしまうのだ。カルにしてみれば、それは何より辛いことだった。

「……ありがとう。カル。」

ノアは笑ってみせた。しかし、心はカルに対する申し訳なさと、自分の非力さへの苛立ちがつのつていた。

そのことは、カルもよくわかっていたから、笑顔で返し、蜜が入った壺を彼女に差し出した。

ノアはその壺を受け取ろうと手を伸ばす。

バチっ！

「っ……。」

二人の手が触れた瞬間、小さな音が鳴った。カルが一步退き、手を押さえる。

「あ、ごめっ……ごめんなさい。」

目を見開いて、慌てて謝るノア。肩が小刻に揺れて、震えている。

「大丈夫だよ。痺れただけ。火傷はしてないからさ。」

震えるノアに手を前に出して見せながら、カルは笑顔を作った。

これが羽根のない妖精に触れない理由。

羽根のない妖精に触れると、痺れた後に焼けただれという現象が起こってしまうのだ。それは、羽根のない妖精が、羽根の分の力を吸収しようとすることからだと言われている。

カルの手がなんともないことを知ると、ノアはホッとしたように肩を落とす。

そんなノアの状態を確認すると、カルは彼女の隣へと腰を降ろした。

もちろん彼女と触れないくらいの距離を置いて。

「ねえ、ノア。言い伝え覚えてる？」

食事を始めたノアを、愛おしそうに眺めながらカルは話題を振った。

「どの言い伝え？」

しばらく考え、いくつかの言い伝えを思い出しながら、ノアは問う。

「人間のさ。」

「……覚えてる。」

すぐに出たカル言葉に、ノアは少し顔を歪めた。

二人とも内容には一切触れなかった。『人間と愛を誓えば、妖精は人間になれる。』その言葉を言いたくなかったのだ。

でもカルは考えていた。今のままより、ノアは人間になった方が幸せなのではないかと。

今のまま生き続けても、誰にも触れることができない。自分だけでは生きることままならない。そんな状態でいるよりは……と。

その反面、彼女が他の誰かを好きになると思うと、怒りとも悲しみともつかないものが沸き上がってくる。カルは知っていた。それが嫉妬から来るモノなのだ。

「実は、町に人間が辿り着いてさ。今、ちょっとした騒ぎになって

るんだ。」

世間話。そう言った感じで軽く話を切り出す。

人間が妖精の町までやってくるのは珍しいことだった。大概は、妖精の町付近にある迷子の結界で、森を追い出されてしまう。

「そうなの。それは楽しそうね。」

ノアは町が賑やかになるのを、想像して笑った。

妖精は、何かあれば祭りをするのが習わしで、珍しい人間が来たなら三日三晩は賑やかだろう。

ガサッ

和やかな時を過ごしている中に、突如音が邪魔をする。そして、ノアとカルの前にある草が掻き分けられ、視界が広がった。

「おやあ、本当に居たわな。」

そこからひょっこりと姿を表したのは、おっとりとした人の顔。にへらと笑みを浮かべ、ノア達を見ている。

「……だれ？」

ノアが目を見開き口を手で押さる。そして、自分よりはるかに大きい顔に問いかけた。

しかし彼が答える前に、カルが彼女をかばうように前に出た。そして、鋭くにらみつけて威嚇する。

「あんた、町に来た人間だな!？」

「そうや。わいはケンワ。噂に聞く羽根のない妖精見にきたんよ。お前さんは誰や？」

威嚇を気にする風でもなく、にこにここと屈託のない笑顔を向ける人間。

笑顔で自己紹介をするケンワに、カルは毒気を抜かれてしまった。また、直感的に彼が悪い奴ではないとそう思い、威嚇するのを止める。

「俺はカルーシャ。カルでいい。……あんた、変なやつだな。」

自己紹介を先にされたため、カルも名を告げる。そして、ため息まじりに一言呟いた。しかし、瞳はケンワを品定するかのごとく動いていた。興味しんしんだと、光る瞳が訴えている。

「あはは、よう言われるんよ。よろしゅうに。さて、羽根のない妖精さんとお話したいんだが、ええかいな？」

ケンワは、カルに視線をやったまま聞いた。彼が了承しなければ彼女とは話せないと思ったのだろう。

威嚇は止んだものの、カルがいつこうにノアの前に立ちほだかったままだから。

「質問に答えてくれたらいいよ。」

カルはそう答えた。

当事者のノアは、不安そうに彼等を見守るしか方法を知らない。



「ええよ。どんな質問や？」

承諾を確認すると、カルは真剣な面持ちで……

「あんた、ノアに惚れたりしたいよな？」

彼はいたって真剣である。ようは、ただ単にノアしか目に入っていないだけだ。

「……そんなことはせんへん。って。」

「その沈黙はなんだよ？」

疑うように食ってかかるが、ケンワの沈黙は笑うのを堪えてるせいだったりする。

ケンワが両手で口を押さえながら、何度か首を縦に振った。押さえている手から、プヒーっと空気が漏れた。笑うのを止められなかったようである。

「な、何笑ってやがる！！」

カルは笑われて、一瞬ぽかんと口を開け驚く。しかし、徐々に顔を赤くし、笑われたことに怒りを露にした。

ちなみにノアはカルより赤くなり、頭を垂れている。

「すまん……気にせんときー。質問には答えたんや。話させてや。」

ケンワはどうか笑いを止め、話を先に進めようとする。

ここで食ってかかっても話が進まないの、仕方なくカルは横に

ずれた。

ノアがおそろおそろ目だけをケンワに向ける。彼は先程と同じ、笑った顔を彼女に向けていた。

「ほんまに羽根ないんやね。」

自分に向けられる好奇の視線に、ノアは目を伏せた。そして、固く口を結んだ。

「……どないして羽根を無くしたんや？」

ノアの様子に少し戸惑ったケンワだが、疑問が口ついて出た。それに対して、ノアとカルの体が大きく跳ねる。それからノアは下を向いたまま動かず、カルは視線を横にずらしていた。

ケンワもその様子を見、この話題がいかに関女達にとって、触れて欲しくないモノなのかわかった。

「あー……話しようないなら別にええ。他の話ししよか。」

困ったように頭を掻き、しばらく考えた後、ケンワはまた笑顔でノアに向けた。

「うん……！」

その言葉に顔を上げ、彼の笑顔を見たノアは、柔らかい笑みを浮かべた。

釣られて笑んだのか、はたまた言葉に暖かみを感じて笑んだのか、カルにはわからなかった。だが、彼女の笑みは羽根を無くす前に見せてくれた笑みとそっくりで、決して無理矢理ではないと感じさせた。それが悔しくて、なぜだかわからない大きな不安が、カルの心

を潰す。

嫌な予感がする。そう頭から警報が鳴り響いて、カルはノアを見ることが出来なかった。

## 羽根のない妖精（2）

日はあれよあれよと過ぎていき、暖かな日射しから寒々しい季節となった。

森の中に紅葉がやってくる。

その頃になると、すっかりケンワも森に馴染んでいた。

果実をもいだり、草原で寝転んでみたりと、日常を満喫していた。また、ノアとはとりわけ仲良くなっていた。ノアはまったく知らない人間の世界のことをケンワに聞いたし、ケンワもノアに妖精のことをたくさん聞いた。

今では二人とも些細なことでも話し合う間柄になっていた。

もちろんカルはそんな二人の様子が気に食わなかった。というよりは、最初に感じた不安がどんどんと巨大化していくことに恐怖さえ覚え、いつもイライラとしていた。

「ねえ、他にも色んなお話聞かせて。」

話のなかでも、ノアはケンワがしてくれるおとぎ話が好きだった。幸せいっぱいのおとぎ話は、ノアの心を癒してくれたから。

今日もケンワに話を催促をする。

「ええで。今日は何の話にしようか。」

ケンワも相変わらずの笑みで今日の話を考えている。

そこへちやうどカルが蜜を運んできた。それにノアは気づくと、満面の笑みで手を振った。とても嬉しそうに。

「あ、カル！カルもケンワからお話聞きましょうよ。楽しいわよ！」

その笑顔で出てくるのはケンワの名前。カルはぎゅっと締め付けられる胸を、無視することができなかった。

ダン！！

大きな音を立て、カルは勢いよく蜜の入った坪をノアの前に置いた。下を向いているため、表情は確認できない。

「どうしたの……？ カル？」

「……。」

不安そうにノアが覗き込んで問いかける。しかし、カルは黙ったまま踵を返した。

ただならぬ空気にケンワは頬を一度搔いてから、口を開いた。

「なあ、カルー。お前さん、なんでそないに額に皺寄せとるん？」

とても軽い口調で、親友にでも話しかけるような、そんな感じの話しかける。

しかし、カルはそんなケンワを睨み付けて一言だけ述べた。

「別に。」

敵視されてるのに気づかないのか、気にしないのか、ケンワは更に言葉を続ける。

「見るたびに思うんやけど、笑ったらどうかいな。そんな険しい顔ばかりしとったっておもしろないし。」

「うるさいな、俺の勝手だろ。」

そんな彼の行動に苛立ちが募っていく。カルは必死に手を強く握った。

出たのはぶっきらぼうな言葉で、もう構うなとそう言っている。それにもまったく動じず、しかし今度は肩を竦め、呆れた様にケンワは忠告した。

「そんな顔しとったら、誰も笑ってくれへんで？」

「うるさいっ！！！」

その言葉にカルは思わず怒鳴った。確信に触れられて頭に血が上っていく。

笑ってくれない。それはカルにとって、苛立ちの核心だった。自分と話すときより、ケンワと話している時の方がノアは笑っている。自分に笑いかけて来る時は必ずケンワが関わって来る話。更に、ケンワと一緒に居て、ノアは以前より明るくなった。自分が知っていたノアからどんなかけ離れていくような、そんな気さえしていた。それは、ノアが自分から離れていくような感覚を生み出していた。

むかつくという言葉がカルの頭をよぎる。

「カル、ケンワさんにそんな言い方ないよ！心配してるんだよ？」

追い討ちというようにノアがケンワを庇う。

カルの頭の中で何かが切れた音がした。それと同時に感情はそのまま、だんだんと頭が冷めてくる。

カルはノアに向き直った。目は冷たく彼女を捕らえている。

「別に。何でそんな奴に心配されなきゃいけないんだよ。だいたいさ、ノアはケンワケンワってうるさいんだよ。」

「こ、こら。」

口が動き出す。もうどうにでもなればいい。そんな言葉にカルは支配されていた。

ノアがカルの言葉に口を押さえる。そして首を必死に横に振った。その様子に、ケンワが止めに入る。けれど、どうにでもなればい  
いと思っているカルの口を止めることはできない。

「まったく。羽根がないから俺が重い蜜を運んでこなきゃいけないし、触れたら触れたで大火傷だ。口を開けば人間の話。もう本当に妖精じゃないんじゃないの？」

淡々と出てくる言葉たち。確かに前々から思っていたことであつたが、そんなことをカバーできるくらいノアが大事だったし、愛おしかった。しかし、今のカルにはその大切さが返って重くなっていた。大切なのは自分だけなんじゃないだろうか？ 彼女は自分より人間のが好きなんじゃないか？ カルは自分の気持ちに押しつぶされそうなどころまで来ていたのだ。

「っ……。」

カルの残酷な言葉に、ついにノアの目から涙が溢れ出た。ぼろぼろと後から後から涙がとめどなく出てくる。

そのかすんだ瞳で必死にカルを見つめるが、彼の表情は変わらないまま。

「泣けば良いと思ってる？」

「いい加減にせい！カル！！」

冷たい態度のままにいるカルに、ケンワが割って入った。珍しくケンワが額に皺を寄せ、カルを睨んでいる。

しかし、その彼の態度は逆効果で、カルの怒りを益々膨れ上がらすだけだった。

「庇っちゃってさ。仲が良いね。」

冷たい視線がノアからケンワに移動した。

ケンワが覚えたのは、寂しさ。額の皺が緩み、眉が下がった。悲しそうな瞳がカルに突き刺さる。

「なあ、カル。ノアのこと好きだったんとかうんか？」

「……嫌いだ。」

ケンワの質問にカルは一瞬躊躇った。表情が変わったのがケンワにもわかった。だが、答えはあまりにも予想とはかけ離れており、ケンワの目が大きく見開かれた。

カルはカルで、自分の答えにショックを受けていた。しかし、カル以外はそれに気付かない。彼の表情が冷たい表情に戻ったから。

ケンワが焦った様にもう一度確認を促す。違う答えが出ることを祈って。

「……ほんまか？」

「……。」

「カル……。」



黙っているカルをノアが震えた声で呼ぶと、カルはびくりと身を震わせ、彼女を睨み付けた。

「大っ嫌いだよ。妖精じゃないんだからっ！もう関わりたくもない！！」

そして、大声で怒鳴ってからあっという間に空へと消えていった。心のどこかでカルは、ノアが人間になってくれれば良いとふと思った。そしたらきつと、この苛立ちも収まるだろうと。そう思っ

「……いつか、こんな日が来るってわかった。」

残されたノアが顔を両手で覆い、震える声で呟いた。声だけではない、肩が小刻に震えている。

泣いているのだと、ケンワは感じた。

「ノア、あれはカルの本心じゃあらへん。気が立つとるさかい、あんな言葉が出ただけや。」

柔らかい口調で、なんとか慰めの言葉をかけるが、それはありきたりの台詞で。ノアの心には決して届かない。

その証拠に、ノアは大きく首を横に振った。

「違う……違うの！ケンワ。私は羽根をなくした妖精。羽根をなくした妖精は、もう妖精じゃないの。」

ゆっくりと手を下に降ろし、まだ乾ききらない赤い目をケンワに向けて、ノアは静かに話出す。

「いつか、こうなる日が来るってわかってた。私はあの日、羽根をなくしてから、妖精に触れられない。私が触れると、彼等の肌が焼けただれたようになってしまうの。私は妖精の敵。それ以外の何者でもない。こんな私は、羽根をなくした時に見捨てられてもおかしなかった。」

また瞳から暖かい涙が溢れ出す。ケンワは、そんな彼女の話を黙って聞いていた。何も言う言葉が見付からなかったから。

「それなのにカルは……それだけで奇跡だったの。」

「そうか……羽根を取り戻せたらええのにな。」

ノアの頭を軽く撫で、ケンワは言った。羽根を取り戻せたら。そうすれば彼女は元の生活に戻ることができるのに。そう思いながら。ノアは瞳を閉じて小さく首を横に振る。そして、ゆっくりと目を開き、ケンワを見上げた。

「羽根をなくした理由。聞いてくれる？」

「ええで。」

予想通りの答えに、笑みを返し、ノアは語り始めた。  
羽根をなくした時のことを。

### 羽根のない妖精（3）

あれは、私にまだ羽根があった頃。

カルと私は、将来の話に花を咲かせたり、毎日一緒に密を集めたり、一緒に踊ったり、楽しい日々を過ごしていた。

あの日は、いつもみたく夕日を眺めながら話をしていたわ。

「なあ、ノアの夢って何？」

「え？ そうねえ……カルのお嫁さんかしら。」

カルの何気ない問いかけに、私は笑いながら答えた。

すると彼は夕日と同じくらい真っ赤になって。相変わらず照れ屋な彼が、そこにいるのが当たり前で。

私は笑いながら、彼の降ろしている手を上から軽く握った。

「ねえ、カルは夢はなに？」

「……大切な人を幸せにすること。」

彼はそっぽを向いて、躊躇いがちに答えた。

彼の優しさが、胸を暖かくする。もっと大きな夢を、持ってもいいのに。そう思ったのを覚えている。

「……ノア？」

私が黙っていると、不思議そうな顔をしてカルは私を見た。視線が合って、思わず笑ってしまった。

「ふふ……カル、大切な人って誰？」

ちよつと意地悪な質問だと思ったけれど、聞いてしまった。もちろんカルは困った顔をして、目を反らした。

「……わかってるくせに。」

ふてくされたように言いながら、彼は私と目を合わせた。ゆつくりとカルの顔が近付いて来る。

額がコツンと小さな音を立ててぶつかった。

「ノアしかないよ。」

私の目の前で、優しい笑みを浮かべる。

私も笑って彼に言った。

「私の大切な人は……カルよ。」

私はゆつくりと目をつむった。

「なあ、その話。まだ続くんか？」

ノアの話がいつまでも本題に入らないどころか、明らかなのろけ話に、ケンワは堪らず口をはさんだ。

一気に現実に戻されたノアは不機嫌そうに頬を膨らませている。

「せっかく良いところだったのに！あの後、カルがそつと口付けし

てくれたのよ。それは甘い甘い」

「んな話はええっちゅーねん。」

頬を赤らめて再度話をしようとするノアに、ケンワはすかさずストップをかけた。

ノアは口をへの字にし、抗議の視線をケンワに送る。

「……あのな、カルと仲がええのはようわかったがな。わいが聞きたいのは、羽根を無くした理由。というか、それを話してくれるんどちやうん？」

「ええ、あの後。あんなことが起こるなんて思わなかった。ケンワ、のろけ話に聞こえるかもしれないけど、聞いて欲しいの。」

ノアは、ケンワに言った。

ケンワはそれに対して口を閉じる。この後に話すモノの心構えを、ノアはしているのだと、そう思ったから。

それを確認すると、ノアは再び話始めた。

「私はゆっくりと、目をつむった。」

「そこからかい。」

先ほどのところから話始めるノアに、ケンワは小さく呟いたのである。

言ったところで彼女の話を止められはしないのだが。

「カルの唇がそっと触れて、離れて言った……」

目を開けて、二人で笑い合うと、夕日を眺めた。赤く染まって行く空が、綺麗だと思ったのを覚えてる。

心は暖かくて、嬉しさでいっぱい……幸せだった。

「ねえ、ノア。俺は何があってもノアを幸せにしてみせるよ？」

カルという言葉は、私の心を優しく包んでくれる。このままの時間がずっと続いて行くんだ。って、そう思ってた。

彼の言葉に心臓がドキドキと音を響かせて、嬉しさと暖かさに包まれていたと言っていた。

だから、彼と約束したの。

「ありがとう。約束ね？」

「ああ、約束！」

にっこりと笑うカルを見て、私も心に決めた。カルを幸せにしよう。って。

カルから夕日に顔を戻して、私は眉を潜めた。そこに、黒い影を見たから。

「カル……誰か悲しんでるみたい。」

暖かさが一気に冷めて、不安が胸一杯に広がった。

赤い空をゆっくりと黒い雲が覆って行く様は、思わず目で追ってしまう。

私達妖精は、涙を流すと雨雲を呼ぶ力があるの。だから、この森の近くに雨が降っていると、誰かが泣いている証拠になるのよ。

次第に雲は近付いて来て、やがて冷たい雫が私達を濡らす。

私は、ギュッとカルの手を握った。その時は、何かが起こるなんて思ってた。でも、感じてた。

恐怖。そう、言葉にすれば恐怖というものを、感じていた。

カルが私を見て微笑んで、やっと私の心は落ち着いた。

「帰ろっか。」

「そうね。この調子だと、嵐になりそう……。」

カルの笑顔に私も笑顔を返した。

雨で濡れた羽根は、飛ぶことができない。だから、私達はゆっくりと地面に降りて、歩いて帰ることにした。

だけど、帰りつく前に嵐はやってきた。

小さな私達は、強い風に飛ばされそうになるけれど、二人とも手を繋いで一步一步踏みしめていく。

カルの手が暖かくて、冷たい滴や強い風に、私はまだ平気でいられた。

けれど、一瞬にして体のバランスが崩れて視界が揺らいだ。その時感じたのは、彼の暖かい手が私の手から離れたこと。冷たい空気が私の手を、体を包みこんだこと。

カルが、必死な顔で手を伸ばして

「ノア！」

って叫んだのが聞こえた。

だけどひどく遅く、カルの手が動いて、私の手の上を通りすぎて

いく。

そうかと思うと、カルがだんだんと私から離れて行った。

落ちているんだ。ってわかった時、カルと繋いでた手がひどく冷たさを感じて、伸ばしたその手がひどく痛さを感じた。冷たくて痛いその手に流されて、胸も痛くなった。

涙が流れ落ちた後、私の記憶は切れた。

気が付いた時には、私の羽根はボロボロで、ないも同然だった。横でカルがごめん。って謝りながら泣いてたのを覚えてる。

羽根が破けた痛さより、泣いてるカルを見ていた方が痛かった。胸が締め付けられて、痛かった。



## 羽根のない妖精（４）

「雨が降って、地面が緩んだの。なのに、崖ぞいを歩いてた。だから崩れて落ちたの。きっと幸せ過ぎて浮かれてたのね。……これでわかったでしょ？」

ノアが笑ってケンワに言った。その笑みは弱々しく、自嘲が混じっているようにとれる。

「私が羽根をなくしたのは、自分のせいだ。ってカルは思ってる。」

「……そやけど、今も律儀に約束守ろうしとんのかもしれへんな。」

遠くを見ながら話すノアに、ケンワはぼつりと呟いた。その台詞に戸惑いを覚えたのか、不思議そうにノアは彼を見る。

「ま、カルに話を聞いた方がええかもしれへん。それと、羽根は元には戻することは……。」

ケンワは、滑り出す言葉を慌て止めた。

ノアの瞳から一滴の涙が溢れ落ちる。思い出していた痛みに耐えられなかったのだろう。

いや、何より羽根は決して戻らない。その現実を突き付けられたことが一番の理由である。

羽根がなくなったのは、千切れてしまったから。怪我と言えども、余りに大きな怪我は、自然に治癒することはない。今まで羽根がない状態が続いていること。それが、皮肉にも治癒できない証明となっている。

「羽根は、ない……決して誰にも触れられない。こんな私……妖精じゃないのよ。妖精じゃないの……。」

次から次へと溢れ出すノアの涙に、ケンワは額に皺を寄せ、頬を掻いた。正直、どうしていいのかわからないのだ。

ケンワは、戸惑いながらなんとなく空を見上げた。晴れわたった青い空が、目の前に広がる。

「ノア……。」

ケンワは、彼女を呼んだ。それに反応してノアが、ケンワを見る。彼の目は空へと注がれたまま。その視線を追って、ノアもまた空を見上げる。

青い世界に、ノアはふと考えるのを忘れた。涙が止まり、頭の中は真っ白。

「なあ、ノア。ひとつ聞いてもええか？」

何も言わないノアに、ケンワは問掛けた。顔はまだ空を見上げたまま。

「うん？何？」

ノアが返事をし、ケンワへと視線を戻す。ケンワもゆっくりと空から顔を彼女に向ける。

ノアの涙が止まっていたことに、ケンワは安堵した。空を見て落ち着いた自分と、きっと同じようなことを感じてくれる。そう思ったことが、あたりだったようだ。

そして、気を取りなおすと彼は言葉をつむいだ。

「あんたら重いんか？」

「はっ？」

真剣な顔付きで。だが、言っていることは失礼極まりない。思わずノアは口をポカンと開けて、ケンワを凝視した。

「……ケンワ……？私が重く見えるの？」

ショックと驚きが隠せない表情のノアに、ケンワは笑って言った。

「そうじゃなくて、崖が崩れる程あんたら妖精は重いんか。って聞いとるん。」

「えっ？……そ、そりゃあ蜂蜜でいう私達の大きさ分の量よりはちよっと重いし、雨で濡れた服と羽根で重みが増してたし……ざっと1キロはあるかと。」

律儀に説明をするノア。ケンワはそれを頷きながら聞いている。

「だ、だからって、私はあんまり重くないよ！？」

ノアははっとして言葉を付け加えた。それに対して、ケンワは笑ってノアの頭を優しく撫でた。

「ノアは、やっぱりそう元気やないとな！」

その台詞にノアは気付いた。彼が自分のことを気遣ってくれていたのだと。そして、元気をくれたことを。

だからノアはケンワに笑って答えた。

いつまでも悔やんでいたところで先には進めない。ノアは意を決して彼に問う。

「ケンワ。妖精は、人間になれるかしら？」

と。

一方、森の中の小さな広場へと場面は移る。

ここは、妖精の街。先日の祭りも終わり、今は静けさが漂っている。

そこに一人の青年が姿を現した。顔は暗く、溜め息が口から溢れ落ちる。

「カル！何かあったの！？」

青年の名を呼び、一人の少女が彼に駆け寄る。

肩まで伸ばしたくるくるの桃色髪が、カルの視界に入る。

「ヤーラ……。」

カルは、するどく殺気だった目を受け止めた。

彼女の名はヤーラ。妖精の少女である。また、ノアの親友でもあった。

「ちょっと、ノアに何かあったんじゃないでしょうね？」

彼女もノアのことはよく知っていた。そして、今も彼女のことを心配している一人だった。しかし、ヤーラは一度ノアを突き放したことがあった。それは、羽根がなくなった直後のノアと対面した時。『あんたなんか妖精じゃない!』そう言ったことを今は後悔していた。だからこそ、ヤーラは今、彼女が幸せであってほしいと願っていた。

「いや……今頃人間と仲良くやってるさ。」

カルはヤーラの脇を通って行こうとする。ヤーラはそんな彼の腕をぎゅっと握った。それにカルは足を止める。

「何?」

カルは腕を掴む彼女を見るわけでもなく、口だけを動かして問うた。それに対してヤーラはカルをじっと見た。

よどんだ空気が彼を包んでいる。ヤーラはそう思った。カルのは赤い、また瞼が重たそうに視界を遮っている。

「……あんた、ノアに愛想でも付かされたの?」

ヤーラの一言に、カルは彼女の手を思いっきり振り払った。思わずヤーラはよろめく。けれど目はまだカルをじっと凝視している。

カルは荒く息をしてからキッと彼女を睨みつけた。ぶつかり合う視線。

「違う!俺が、俺が……。」

否定をしたがすぐに顔を落とし黙り込むカル。ヤーラは、軽く頷いて腕組みをする。どうやら状況がわかったらしい。

ちなみにヤーラは、ノアの親友であり、カルとの付き合いも長いのである。彼のクセを彼女はよく知っていた。

「不安になると人の目が見れないクセ。直せつつってんだろ。」

そして、足蹴りを一発食らわせて、倒れたカルに視線を合わすようにしゃがみこんだ。

彼女の顔は怒っているのか、眉の端が上がっている。

「カル。あんた私に約束したわよね？ノアに私が会わない代わりに、あんたがノアのこと面倒見るって。っていうか、近づくなんて言うっておいて、人間のところにノアを置いてくるなんてどういう見！？」

言いたいことを言いながら、ヤーラは起き上がれずにいるカルの額を数度叩いた。カルは視線だけをずらしてそれに耐えている。

「……カル。とつととノアのところに戻れ。」

しかし、そんなことお構いなしにヤーラはカルに一言付きたてた。それには流石にポカンと口を開けて彼女を見てしまうカル。

「あのねえ、あんたは気にしすぎるのよ。というか、ノアしか見えてないのよね。昔からそう。私が話してるのに視線はノア。今も昔もあんたは変わってない。だ・か・ら！どうせ、あんたのつまんない焼もちなんでしょ！ノアしか見えてないならもういっそノアしか見んじやないわよ、この阿呆！」

そして一気にまくし立てあげる彼女の言葉に、カルの顔は耳まで赤くなった。言い返そうと起き上がるカルの頭を一突き、もちろんカルはその場でまたもや体勢が崩れる。ヤーラは、気にも留めずそ

のまま自分が言いたいことを続けた。

そして笑顔で最後に一言。

「とつとつとノアのところに戻れ。」

流石にもうこれ以上何を言っても無駄だと感じ取ったカルは、仕方なく起き上がって方向転換を行う。

それに満足したように、カルの背中をバンと叩いてヤーラは見送りの言葉を投げた。

「あんた早とちりしやすいんだから、ちゃんと言聞いてきなさいよ。きつとわかるわよ。ノアもあんたしか見えてない。ってね。さ、さっさといつてらっしゃい。」

半ば強引に見送られ、カルはトロトロと羽根を羽ばたかせる。

しかし、カルの顔は先ほどと違い、すっきりしていた。

ノアに言ったことの重さを忘れていたわけではない。けれど、離れてしまうことが自分にとって辛かったのだと気づいたのだ。言った事を謝らなければ。そうカルは思っていた。

カルにそれを気づかせてくれたのはヤーラで、ヤーラはきつとノアへの償いができた。と思ったに違いない。いや、カルと違って彼女はノアへの罪滅ぼしができたのだ。カルはそれを羨ましく思った。自分は償うどころか、彼女をもっと苦しめてしまったに違いないから。

苦しめてしまったかもしれない。だから、何かしてあげたい。それもカルを追い立てる一つであると同時に、ただカルは、彼女に会いたかった。

彼は、もと来た道に行く。

## 羽根のない妖精（5）

木々の中、カルは羽根を羽ばたかせ飛んでいた。そして、程なくして彼は二人を見つけた。近寄る前に地面へと着地する。葉の影から影へ音を立てないように近づいていく。

正直、先ほど酷いことを言い飛び出したことを思うと、すぐに顔を出すことに躊躇いを覚えたのだ。

移動を繰り返し、ようやくと声が聞こえる場所までカルはやってきた。そして、今どういう状況になっているのか知りたくて、聞き耳を立てる。

「じゃあ……から……いいのね？」

「そういうこった。」

ノアの台詞が断片断片でカルの耳に届く。それから少ししてケンワの答え。集中すれば、やっと話が聞き取れる。

ノアが嬉しそうに手を打って口を開く。今度はよく聞こえた。

「じゃあ、結論は簡単。私がケンワにキスしてもらえばいいんだ！」

その言葉は、カルを固まらせるのに十分だった。カルは自分の耳を疑った。が、しかし、更にケンワの声が追い討ちをかける。

「そや、わいがノアにちゅーすりゃあいいはなしなんや！」

驚きのあまりカルはよろめく。そして、葉がガサリと音を立てた。もちろんその音に二人がカルの方を向く。

そして、よろめいて一歩踏み出した足は、彼の身体を葉から追い



出す形となった。

カルとノアの視線が会う。

「カル！」

ノアが口元に手を当て目を見開く。しかし、カルは彼女を見ることはできなかった。すぐさま視線を落とす。

「……おめでとう。」

その一言しかカルには言えなかった。ノアが何かを言おうと口を開くが、カルは踵を返して走り出していた。カルは自分が何をしているのか、よくわからない。感情では自分を下卑する言葉と、悔しさとも空しさともつかないものが渦巻いているのは自分で感じていた。だけど、考えはまとまらない。ただ足は動いて、目からは熱いものが流れ落ちる。

ノアとケンワが仲良くなれば良いと思ってた。ノアが人間になりたいなら、なったら良いと思ってた。人間になったら彼女は誰にでも触れられる。決して一人にはならない。だから、その方が幸せなんだ。って言い聞かせてた。でも、本当は違っていた。誰にも触れられない彼女に安心していた。彼女には自分が必要なんだと、そう思っていたから。だけど、今は、きつともういらぬに決まっている。そうカルは思った。

答えのない問答を自分の中で繰り返し繰り返し。だから、カルには周りが見えていなかった。

顔に冷たい水が当たりだしたことも、ノアが自分を追って駆けてきていることも、カルにはまだわからなかった。

自分の涙のせいで、雨雲が押し寄せて、冷たい水が地面を叩き始める。

既に髪から顎にまで滴る水。カルはやっと足を止めた。もう何も

考えたくない、とそう思ってそらを見上げる。

稲妻が横切って大きな音が耳に響く。羽根も塗れて今や身体は重い。

「カル!!」

聞きなれた声が彼を呼ぶ。カルは振り返った。びしょ濡れのノアがこちらに駆けてくる。

カルは手を伸ばした。ある光景と今の状況が酷似していたせいか、無意識に手が伸びた。

あの日は今と同じで雨がひどく、地面がぬかるんで、羽根さえ動かない。そして、冷たさの中の暖かい手を思い出していた。それを求めて手が出たのだろう。

しかし。

バチっ！

そういう音が鳴った。カルははっとして、手を引いた。ノアも音に反応し身を引く。しかし、ぬかるむ雨の中、とっさにとった行動は上体を崩す要因となった。

ノアはよろめいて膝をつく。しかし、膝をついた場所は崖のすぐ傍。ノアもカルの嫌な予感がした。慌てて身を起こそうとするノアだが、それよりも先に足から地面の感触が外れた。ガラガラという石が落ちる音が耳に響く。

落ちた！そう思ってノアは目をつぶった。しかし、一向に落ちた感覚はない。聞こえるのはザーザーという雨の音とバチバチと何かなる音。ノアは慌てて瞳を開けた。

彼女の予想通り、暖かい手が彼女の手をしっかりと握っている。

その手の先には、顔を歪めながら一身に彼女を引き上げようとしているカルがいた。痺れるような痛みと戦っているカルを見て、ノアの心は締め付けられた。時間が経てば彼女の手は焼け爛れたようになってしまう。いや、既に彼女の手から煙が出てきている。ノアは叫んだ。

「離して！カル、離してよ！！」

「……嫌だっ！」

カルは更に手に力を込めた。それに、ノアは首を横に振る。彼女の目からも涙が溢れ落ちる。

そんな彼女と未だ視線を合わせず顔を落としているカルは、言葉が続ける。

「いいんだ。ノアがケンワが好きだって別に。そうじゃなくて、俺がノアを助けたい。あの二の舞はごめんなんだ。」

カルが顔を上げる。そして、泣いて声が出せないでいるノアに笑いかけた。その弱弱しい笑顔に、ノアは彼の手を強く握り返した。だんだんとカルは引きずられていく。崖のほうへと。ノアが握り返してくるのを感じてほっとしたのだろう、一瞬力が抜けた。だから、カルの身体もノアと共に宙に舞った。

「ごめん。ノア。約束が守れなくて……。」

カルは小さくそう言うと、ノアを引き寄せ彼女を抱きしめた。ノアはその行動の意味がわかった。自分を庇うつもりなのだと。

羽根は重くて使えない。それから、ノアに触れたカルの身体はだんだんと嫌な匂いをちらつかせる。ノアは、彼の腕の中で泣いた。

顔を手で覆って泣くしかなかった。

ガササという音が響く、もうすぐ地面だとノアは思った。しかし、受けたのは思ったよりも軽い衝撃。

「いやあ、間に合ったんやなあ。」

上から降ってくる声。それに反応してか、カルの身体から力が抜けた。ノアは起き上がると、カルの身体を自分から引き離す。彼の意識がもうないのを知り、涙が止まらない。

ボロボロと涙を溢しながら、ノアは声を発した人物を見上げる。

暖かい大きな手で自分たちを包み込んでくれる人物。人間のケンワが困ったように二人に視線を送っている。

ケンワが地面すんでのところで二人をキャッチしたのだ。彼の影になっているのだろう、雨がノア達を打ちつけることはしない。

ノアはカルの背中へと視線を移す。ボロボロになった羽根がうっすらとなって消えていく。なくなっていくのだ。

「い、いや……なんで、なんでカルまで羽根が……。」

ノアの手がカルへと伸びた。目を閉じたままの彼の頬へと手を近づける。

バチッ！

音と共にノアは手を引っ込めた。自分の手に残る痺れるような痛み。

決して羽根がない妖精同士でも触れられない。どちらにも触れられない症状が出てしまうことを、ノアは理解した。

理解したと同時に頭を、顔を、首を、何度も何度も爪を立ててがむしゃらに掻き、ノアは叫んだ。

「……や、いやああああ!!」

「ちょ、落ち着けノア!!」

喉が壊れるような悲痛な悲鳴に、ケンワは大きな声で打ち消した。ノアははっとして動きを止める。そして、乱れた髪をそのままにゆっくりと顔をケンワへと向ける。

「ケン、ワッっ!」

顔をくしゃくしゃにして、しゃっくりを抑え必死に呼ぶノア。その隣には、腕から足まで焼け爛れたような後を持つカルが気絶している。ケンワはそれを見て額に皺を寄せた。

「これが、触れられない理由かいな……。」

「カルが、カルがあっっ!」

「わかつとる。ノア、落ち着かんかいな。わいより他の妖精に見せたほうがええやろ。」

上手くしゃべれないノアに苦笑いを返し、ケンワは二人を乗せたまま立ち上がった。

ノアは、カルへと視線を向ける。どうしても目は彼の背中へ行ってしまう。

「だ、駄目っ。カルも羽根をなくし……たの。ひっく。誰も触れら

れ、ない。」

「そうは言うてもな、このまんまにはできん。大丈夫や、きつとどうにかなるさかい。」

そう言って、ケンワはカルとノアを片手に移動させた。それからノアだけをつまむと、自分の肩へと移動させる。二人が触れてこれ以上傷つかないためだ。

ケンワの包むような優しい声に、ノアはだんだんと落ち着きを取り戻してきた。けれど、頭の中で回るのはよくないことだけ。不安で胸が押しつぶされそうだった。

「ケンワ……カルは勘違いしてる。さっきね……カルが耳元で囁いたの。ごめん。って。私、私……。」

ノアは頭を抑えながら独り言のように、小さく口を動かした。何か言っていないと壊れてしまいそうだ。そう必死に訴えているようだ。だからケンワは、うん。と言って相槌を打つ。

ケンワは知っていた。ノアがカルのことを一番に考えていたことを。もちろん、カルがノアを好きで空回りしていることも、傍から見ているケンワにはわかってのことだった。だから、どうして二人がこうなったのかも、ケンワにはよくわかった。ただ、どうしてこうなる前に二人の気持ちを互いにわからすことができなかったのか。そう思うと、苦虫をつぶしたような気持ちになるのだった。

これから二人はまた行き違いを起こしてしまうのか。ケンワはノアの独り言を聞きながら考えていた。

## 羽根のない妖精（6）

あの出来事から数日が経った。カルもノアも落ち着いた。そうケンワは聞いた。

だから、数日振りに皆で集まることにしたのだ。もちろん、カルが来ないだろうと踏んで、ノアの親友のヤーラに連れてきてもらうようお願いしたりもした。

「ほーら、カル！」

「うっせえな、行くよ行く！」

高い声と若干低い声が言い合いながら近づいてくる。それを、ノアは笑顔で迎えた。

やってきたのはヤーラとカル。渋々と言った感じでカルはヤーラに連れてこられた。

連れてこられた場所には、ケンワとノアが待っていた。

「ヤーラ！」

「ノア！連れてきたわよ、あんたの連れ。」

ノアの呼び声に笑顔で答え、ヤーラはカルを指差す。ところどころ包帯をしているが、どうやらカルは元気のようにだ。ノアはそれを見るとほっと安堵のため息をついた。

けれど、カルの背中にはやはり羽根がない。

「……カル、やっぱり羽根……。」

「……ああ、なくなった。」

おそろおそろ問うノアに、カルは静かに頷いた。その答えに、ノアはシヨックを隠しきれずに後ずさる。カルの方も横を向き視線を落とす。不自然な二人の動きは場をぎこちなくさせている。

「いいんじゃない？これで二人ともとってもお似合いよ？」

ヤーラはそんな雰囲気をぶち壊すかのように二人にちゃちゃを入れる。しかし、二人とも黙ったまま反応を示さない。

肩を潜めてヤーラは、見上げるようにケンワを見た。彼は彼女に笑ってウィンク一つ。大丈夫。そう言っているようだ。

ケンワも黙っていると、カルがゆっくりと口を動かし始めた。

「……お似合いなのは、ノアとケンワだろ。」

バシンっ！

何かを強く打つような音が辺りに響き渡る。その音に一番驚いているのはカル。いや、音よりも自分の頬に生まれた痛みに目を白黒させているのだろう。

ノアは痛烈な平手打ちをカルにお見舞いした後、腰に手を当てて上体を起こした。そしてカルを睨み付けるように見る。

「カルの馬鹿！とんちんかん、わからずや！勘違い野郎！！」

ノアから想像も出来ない言葉が飛び交う。ヤーラが目を見開きながら、心当たりのケンワを見る。すると、予想通りケンワが口笛を



吹いて笑ってみせた。どうやら、彼がノアにいろいろと吹き込んだらしい。

カルが反論するまえに、ノアは涙を流し息を切らせながら言葉を詰まらせた。

「私は……私はカル以外好きじゃないんだからっ!!」

そして大声で叫ぶ。叫んだ内容は、カルを固まらせるのに十分だった。

カルは先ほどより目を大きく見開いてから、頬を紅潮させた。やっと言葉の意味を理解したのだ。しかし、なんと言っているかわからずに、台詞を発するタイミングを逃してしまふ。

黙っているカルにノアは視線を送る。そして、しばらく彼を見てから一度瞳を閉じ、口をぎゅっと結んだ。そしてゆっくりと瞳を開くと言葉を綴った。

「……カル。私の言葉を信じてくれるなら……私と一緒に人間になっ  
て?」

「え?でもっ。人間になるには、『人間と愛を誓えば、妖精は人間になれる。』って言う話じゃないか。俺は……俺はノアしか愛さないっ!」

ノアの言葉に戸惑って、それでも必死で自分の思いを彼女へと届けた。ノアから受け取った思い、それに答えたかったから。

カルの言葉にノアは思わずたじろいだ、嬉しさが勝ったのだろう。恥ずかしそうに笑みを溢していた。

「それはわいから説明するで。カル。」

ケンワは話がひと段落したことに気づき、割ってはいいる。その彼の言葉にノアとカルは頷いて答えた。

ケンワが話し始める。

「『愛』っていうんは、曖昧な表現や。親子愛、兄弟愛なんかもあるし、好きという部類なら友情もあるやろ。そして最後に恋心。なご種類は豊富やな。『愛』を誓えばいいんならなんでも試してみる価値はあるやろ？」

「ようするに、友情ゴツコとかそんなもんってこと？」

カルの言葉に頷いた見せるケンワ。そこでノアが首を傾げた。

「あれ？既にやった人がいたんじゃないの？ケンワ。」

「ああ、御伽噺やけど。妖精から人間になったっていう話は聞いたことがあるんや。友達を助けたいと思ったとか記憶に残つとるで。せやけど、それは羽根があつた妖精の話やし、あくまで御伽噺や。……どややってみるかいな？お二人さん。」

ノアの疑問に答え、あくまで挑戦権は二人にあるんだぞ。と主張する。

それにノアは頷き、カルは眉をしかめた。そして問う。

「方法は？」

「なんや、呪いをとくんのも、眠りから覚ますんのも、そういうもんは昔っから熱いベーゼってのが決まっとんのや。」

一瞬にしてカルは数歩退いた。熱いベーゼとは、格好良く言って

いるが接吻のことである。

それを理解するのに、カルの頭は数分かった。退いたまましばらく固まっているカル。

そんなカルを見て、ノアは心配そうに指を組み合わせたり外したりしながら一言。

「ベーゼって、キスのことよ？カル。」

ノアに更なる追い討ちをかけられるカル。そんなものはわかってる！っと思わず突っ込みたくなったが、口はパクパクと動くだけ。だからこそショックを受けているのだと、ノアはまったく気づいていないようだ。

「……やだっ！絶対嫌だ!!！」

そして、やっと出たのは拒否の言葉。人間になるにはケンワからの接吻が必要だということが、頭で理解できたせいだろう。顔を横にぶんぶんと勢いよく振って否定する。

「……ほな、ノア。お前さんだけでも人間になろうやないか。」

そう言ってノアを軽々と持ち上げる。不安そうに、でも。と呟くノアにケンワはウィンクをしてみせる。任せとけ。そういう行動なのだ。とノアは知っていた。不安は消えそうにないが、ノアはケンワを信じることにし、小さく彼に頷いた。

「あーあ、いいの？カル？ノア、このままじゃ一人で人間になっちゃうよ？」

いままで傍観をずっとしていたヤーラが、笑いながらカルに言う。

その言葉は、カルを焦らせた。

しかし、カルは焦ったものの、言葉を詰まらせ下を向いてしまう。

「ねえ、カルー。いいの？それでも。」

ヤーラが更にカルをつつき始める。それに、カルは聞こえそうにない声でポツリ。ヤーラは耳を傾け聞き返す。

それにカルは顔を真っ赤にしてやっと聞こえる声で言った。

「の、ノアが他の奴と……キスするなんて嫌だ。」

このバカップル！それがヤーラの内心の突っ込みだった。が、それが声に出ないように彼女はそう。とだけ答えた。もちろんカルから視線を外して呆れたように、である。

「ほな、ノア。準備はええか？」

そんなこんなでカルがノア馬鹿っぷりを発揮している間に事はとっとと進められていた。恥ずかしい台詞をスルーされ、落ち込むようにカルの背中に影が差す。

しかし、そんな彼にノアは新鮮を送り笑って見せた。大丈夫。そう言っているようだ。

そしてノアはケンワへと向き直る。

「私は、ケンワが好き。かけがえのない人だと思ってる。貴方に出会えなかったら、私はきっと妖精じゃない。ってそう思ってる……今は、本当は人間になれなくてもいいって思ってる。私ね、貴方に会えて強くなれた気がするの。どうなっても今は怖くない。カルもいるし、ケンワならなんとかしてくれる。って信頼してるから。だから、後はよろしくね。」

ケンワの両の手に乗っているノアはケンワに微笑んだ。すっきりとしたような顔。ままでの泣いているノアからは決して見れない笑顔だった。

「わかったで。まかせときい！目を閉じるんや、ノア。」

ケンワも満面の笑みで答える。ノアは大きく頷くと、そっと目を閉じた。ここまできると、カルも黙って様子を伺った。ゆっくりとケンワはノアに顔を近づける。

「わいは、ノアと親友という愛の絆を結ぶと誓う。」

そう言ってケンワはノアの額に自分の唇をそっと押し当てた。

## 羽根のない妖精（7）

『人間と愛を誓えば、妖精は人間になれる。』その言葉がノアの頭に響き、彼女の身体が光ったかと思うと、ぐっと大きくなっていく。ある程度まで大きくなると急に止まった。薄い水色のノアの髪がなびく。長い髪は小さな葉を覆い隠す。長い睫から、うっすらと大きな瞳が顔を出した。

大きくなったノアは、妖精だった頃の丸びた頬ではなくすらっとした細身の輪郭を持っていた。白いワンピースを身にまとい、折れてしまいそうな細い腕は地肌をさらしている。思わずその場にいた全員が見とれてしまうくらいの、そんな容姿を持つ人間の乙女になっていた。

「……ノア、綺麗！」

ヤーラがパンと手を叩いて飛び跳ねた。ノアはそう言われて自分の手や身体を目で追う。それから、ヤーラに視線を向けた。自分よりも小さくなっているヤーラを見て驚いたように手を引っ込めるが、しばらく考えたのち、彼女に向けてノアは腕を伸ばした。

おそろおそろヤーラに触れるノア。ふわりとした彼女の桃色の髪に指先が触れ、暖かい肌へ感触が移る。

ノアは思わず涙を流した。触れる。そのことにほっとしたのだらう。涙が止まらない。

「わ、わたし……人間になれた……のね？」

呟いたノアの言葉に、ヤーラはにっこりと笑って頷いた。しかし、すぐにヤーラの顔も崩れた。ボロボロと二人の目から溢れる滴。ノアはヤーラから涙が流れるのを見て驚き、彼女に顔を近づける。そ

して、心配そうに覗き込んだ。

「ごめ……ごめんね。ノア。人間になれておめでとう。あのね、私。貴方に謝りたいことがあるの。」

涙を拭って、ヤーラはもう一度笑顔を作った。そして、意を決したように真剣な表情になる。

「私、ノアに酷いこと言ったでしょ？あれからさ、ずっと後悔してた。ずっとノアのとこに行く勇気がなくて……今回、ケンワさんがノアに会えるチャンスをくれて私、飛び上がるほど嬉しかった。だから、言わせて。今までごめんね？ノア。」

ヤーラは自分の気持ちを口にして苦笑いをしながら、そっとノアの様子を窺った。ノアはそれに口を緩ませ、瞳を閉じて頷いた。

「……ヤーラ。ありがとう。でも、私氣にしていけないわ。ヤーラにこうやってまた会えて触れられる。それが嬉しくて、そんなことどうでもいい。ヤーラ、私は人間になったけど、友達でいてくれる？」

ノアの言葉に、ヤーラは満面の笑みで頷き、『もちろん！』と大きな声で答えた。

それを見ていたカルに、ケンワは目をやり耳打ちをする。それに對して一歩退くカル。

「上手くいったやろ？ほな、次はカルの番やで！」

一歩退いたカルを見ながら、意地悪く二人につげるケンワ。カルは彼を見て、必死に首を横に振った。それもそのはず。ケンワに耳打ちされた内容は『妖精から人間になった奴からのキスでは奇跡は

起こらない。』というものだった。ようするに、ノアによるキスではカルは人にはなれないのだ。そうすると残っている人間はケンワのみとなる。

「……お前と友情を築いた覚えはない!!」

やはり嫌なのだろう。カルはケンワに食ってかかった。しかし、ケンワは表情を崩さず意地の悪い笑みを浮かべたまま。

「なーに言うてんのや。喧嘩する程仲がええ。って言うやろ。カル。」

カルの頭に軽く手を乗せ、意地悪な笑みからさわやかな笑みに変えるケンワ。それに固まったように動かずカルは彼を凝視した。口が小さく動くが声がまともに出ていない。

「なんや、人間になりたくないんか？ ほなら、ノアはわいと一緒に来てもらおうかいなあ。」

「……何言ってんだよ。友達だろ？ ケンワ。」

鼻歌交じりに言うケンワに、カルは決心した。引きつる笑みを浮かべながら感情の籠っていない言葉を吐く。

その言葉に満足したのか、ケンワは頷いてみせた。

そして、彼に顔を近づける。

「大丈夫や、わいはカルのこと好きやで？」

にんまりと言うケンワに、カルは思わずそっぽを向いた。そして、ぽつりとケンワに返答する。



「別に：俺だってあんたのこと嫌いじゃない。……今までノアのことありがとう。な。」

その言葉にケンワは、ははっと声を出して笑った。カルが、嫌な奴ではないと思っていたが、礼を言われるとは思っていなかったからだ。

だが、すぐに真剣な顔に戻し、ノアの時と同じように誓いの言葉を発した後、カルの額に軽く唇を触れさせた。

カルの身体が大きくなる。ノアよりも一回り大きくなったところでそれは止まった。

短い紫色の髪、小さく丸くなった耳が顔を出している。カルは、自分の身体を見るよりも先に、ノアを見た。彼女もまた彼を見た。視線が絡み合う。

ノアはヤーラを降ろすと、そっと手をカルに差し出した。恐々と言ったような感じでゆっくりと。カルはその手にそっと触れた。そして、何も起こらないのを確認すると、彼女の手をぎゅっと握る。カルが笑うと、ノアも微笑んだ。

カルが、彼女の腕を引き寄せて抱きしめる。決して触れることができなかった温もりが、今彼の腕の中にある。だから、無意識に強く抱きしめていた。

ノアもまた、彼の肩に顔を埋め、彼に応えるように彼の背中に手を回した。

「ノア……。」

カルが彼女の名前を呼んで、ノアは手に力をこめた。肩が小さく震えているのを、カルは感じていた。泣いている。それに気づくの数分とかからなかった。カルは、優しくノアの頭を撫でた。彼女のさらりとした髪が指をすり抜ける。

「……もう、触れても傷つかない……のね？」

ノアのか細い声に、カルはああ。と頷いた。

触れられなかった思い。それが溢れ出すかのように、ノアは泣いているのだ。しかし、すぐにノアは、カルの身体からし自分の身体を少し離し、彼の顔を見る。

彼女の目が少し赤らみ、頬が濡れていた。涙が溢れた後がくつきりと姿を現しているのを見て、カルは彼女の頬に手を近づけた。そして、そのまま涙をふき取る。ノアがそんな彼の手をとって、笑みを浮かべた。

カルも彼女に笑みを返した。

「ノア。約束覚えてる？」

「うん。幸せに、してくれるんでしょう？」

「ああ、絶対にもう、離さない。幸せにしてみせるよ。」

見詰め合う二人。カルはそのまま彼女に顔を近づける。ノアはゆっくりと瞳を閉じた。唇と唇が重なり合った。

時間がそのままゆっくりと進む。そして、ゆっくりと離れていった。

甘い甘いキスの後、二人は顔を見合わせて笑い合った。

しかし、そこでやっと邪魔が入る。

「ええ加減、子供の前でいちゃつくんの。やめてくれへんかいな？」

ちゃちゃを入れた声はケンワのものだった。びっくりして、カルが声のほうを向くと、自分よりも一回りも二回りも小さな男の子が

こちらを見ている。

ノアが顔を赤くして小さな悲鳴とともに、カルから距離をとった。カルは固まったまま、目だけで少年をじっと見た。顔は見たことがある顔である。しかし、あまりに見ていたサイズが違うせいか、カルの瞳にはまるで別人に写っていた。

「……あんた……ガキだったのか!!?」

悲鳴に近い声がカルからあがる。信じられない。そういったように目を見開くカルを、ケンワは頬を掻きながら少々困ったように頷いた。

「いや、わいもまかさカルとノアがこんな年行ってるとは思わなかったんやなあ。」

「あら、私たちは妖精では立派な成人だったのよ? 言ってなかったかしら?」

ケンワだとわかると落ち着くノア。笑みを向けながらほのぼのといった感じで言葉を紡ぐ。

それにケンワはどうだったかな。と頭を掻いた。二人の間に花が飛んでいるように見えるのは気のせいだろう。

「いや、それはどうでもいい。なんつーか……あんた、ませたガキだな。」

「ま、ませ?」

カルがまだ少し驚きが消えない顔でケンワに率直な意見を述べた。それにケンワは思わず聞き返す。

ケンワの反応に、カルは手を顎に置き、少し考えた。自分が思っていることが上手く伝わっていないと判断したのだ。しばらくして口を開く。

「いや、子供っぽくない発言とかしてたしさ。俺と同じくらいかと思ってた。あんた、子供にしちゃ妙に大人びてないか？」

カルの問いにケンワは苦笑った。そして視線を落とす。しかし、すぐに顔を上げてにっと笑ってみせた。

「それはなあ。きっと背伸びしとるさかい、そう見えんのや。わいは故郷から出ているんなとこ旅しとる子供や。子供として生きていくことはでけへん。そやけど、故郷忘れんように、使えへん言葉必死に使う取るようなところはまだまだ子供やで。」

「ケンワ……なら、私たちも一緒に行くわ。そうしたらケンワは子供でいられるんじゃない？」

ケンワの言葉に、初めてケンワの素性を知ったノアは多少ショックを受けた。けれど、すぐさま立ち直ると一つの提案を彼にするのだった。しかし、ケンワは首を横に振った。

「駄目や。あんさん等は人間でない。妖精や。故郷を捨てたらあかん。」

自分のこともあるのだろう。ケンワは彼女たちが自分と一緒に来ることを拒否した。だが、そこでノアが引き下がろうとはしなかった。

「そんな。私たち、もう人間よ？妖精じゃないわ。だから、人間の

世界へ行かなきゃっ。」

「……人間の中で妖精が見えるんわ、子供だけなんや。わいも実はそろそろヤーラが見えなくなりつつあるんや。せやけど、あんさん等はまだ見えるんやろ？大人で妖精が見えるんは人間じゃあらへん。妖精や。」

ヤーラがいるであろう場所にケンワが視線を送った。しかし、その視線ははつきりとヤーラを捕らえてはいなかった。

ノアとカルが反論する前に、ケンワはもう一度口を開いた。

「ヤーラ。妖精はノアとカルを受け入れてくれるんか？」

「え、ええ。害がなければ大丈夫なはずよ。」

目を閉じ、耳を澄ますケンワ。その耳にはヤーラの声がやっと届くくらいになっていたのだ。しかし、内容を把握したのだろ。ケンワは笑って、良かった。と呟いた。

「ちょ、待てよ！お前はどするんだ！？」

荷物をまとめ始めるケンワに、カルが手を伸ばして彼の手をとった。ケンワは止められた手はそのままにもう片方の手で身支度を進める。そして、カルの顔を見ることなく、言葉だけで答えた。

「また旅に出るんや。」

「なっ……ここにいろよ。別に生きるのに不便はないだろう？」

「あかん。わいの役目は終わったさかい。いつまでもここにはおら

れへんのや。」

頑なに考えを変えないケンワ。その雰囲気にはカルは彼がここに居てはいけないのだと悟った。それはきつと、羽根をなくしてはいけない妖精と同じような、そんな意味なのだと。

「なら、やっぱ俺たちもついてく！」

「駄目や！カル！！なんで人間が大人になったら妖精が見れなくなるかわかつとんのか？人間の世界にいれば、何も知らんあんたらなど、最悪すぐに死ぬことやてあるんやで！ノアを……殺したいんか？」

カルの手を振り荒い、ケンワが怒りを露わにした。彼の迫力に押され、カルは黙ってしまう。また、言葉の意味にも反論できない理由があった。ケンワが言うことは本当だと、カルの心が警告を出しているのだ。

「……あんたらには幸せになってほしいんや。大丈夫や、今までやって生きてきたんや。わいは丈夫やで。」

ケンワが荷物を背負い、笑ってカルに手を差し出した。カルは一瞬戸惑うが頷いて彼の手をとった。

「わかった。俺たちも幸せになる。けど、ケンワ。お前も幸せになれるよ？」

「おう、約束や！また遊びに来るさかい、そんな時、約束守ってるかどうか確認しよや！」

ぎゅっと握り返すと、ケンワはカルから手を離し、ノアへと向かい合う。

「な、ノア。泣くな。あんさんにはカルも妖精の仲間もいるやろ？その大事なもん守ったれ。わい、妖精達好きや。自分の子供にも会わせたいんや。せやから、お願いするで？」

にっと笑ってみせる。ノアは涙を拭いながらこくと頷く。彼女にしてみれば仲のよかった彼との別れは寂しいものだろう。カルが、そんな彼女の頭に手を置き引き寄せる。そして、旅たつべく背中を向けるケンワに片手を上げた。

「今度遊びに来る時は元気な子供でも見したってや！」

一回振り向いて手を振るケンワ。彼の顔は満面の笑みだった。ノアもヤーラも彼に手を振った。すぐさま彼は駆け出して、姿が見えなくなった。

お幸せに。その声が耳に、心に届く。

カルはノアの頭を軽く叩いて、言った。

「幸せになるって約束しちゃったからな。ノア。」

「わかってる。ケンワに負けないようにしなきゃね。カル。」

それにノアも答えた。

木々が生い茂る森の中。その中に存在する妖精の街。そこでは今日も緩やかで優しい静かな時間が流れる。

その時間の中、ノアとカルは妖精の仲間と共に幸せに暮らしたとそれを、ケンワが知るのは数年後となる。

また、大人になったケンワも今度はその妖精の街で幸せに暮らしたとか。

でもそれはまた別のお話。

完



## 羽根のない妖精（7）（後書き）

恋愛を目指して書いたお話です。

内容的には、まあ流れを初め決めてて、そこから増えた感じになりました。

個人的には、ほのぼのメルヘン。どっちかとういうと友情よりになった気がしてなりませんが、楽しんでいただければと思います。

内容は私的にはちょっとありきたりになってしまったかな。と反省しております。

もっちと恋愛は過程が大事かもしれないと思った一作でした。

ケンワの口調。妙に変な風にナマってますね。これは最後に出てきた理由なんです、当初はカルと口調が被るってことでこんな感じで使っていました。

だけれど、いかんせん私都内生まれ、育ち。なまりの方はかなり曖昧だと思えます…そこは目をつぶってくださいると嬉しいですよ（||||）

ここまでお付き合いくださってありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5639j/>

---

羽根のない妖精

2010年10月28日06時43分発行